



ほうさ 第8号

1981年12月
名古屋市蓬左文庫
Nagoyashi Hōsabunko

展示屋 よ り

むかしの辞書展

12.5(土)～1.31(日)

「辞書」というと、一般的には「字書」「辞典」「字典」など、いわゆる「字引」をさすのが通例で、「百科事典」のような、語義の解釈よりも事象そのものの説明を主とする「事典」類とは区別される。たとえば、古くから「辞典」や「事典」がつくられた中国においては、百科事典的なものを「類書」、語学辞書的なものを「小学」として区別していたが、この「類書」と「小学」、すなわち「事典」と「辞典」の境界は必ずしも明確にしがたいので、ここでは、仮にこれらを総称して「辞書」とよび、その歴史を概観するのがこの展示会の主眼とした。

さて、中国の辞書で最も古いものは紀元前2世紀ごろに成立した周公の「爾雅」(「書経」「詩経」等の語彙を当用語で訓釈した字書)が知られ、その後の隋代の「北堂書鈔」、唐代の「芸文類聚」「白氏六帖」、宋代の「太平御覧」「太平広記」「冊府元龟」「玉海」、明代の「永樂大典」「三才図会」「字彙」、清代の「淵鑑類函」「古今韻略」「佩文韻府」「康熙字典」等々、有名なものだけでもかなりの数にのぼり、中国の学問(特に儒学の経書)崇拝の伝統をあらわしているが、「芸文類聚」はじめ官撰のものが少ないのは、官吏の科挙登用制に支えられてのこととも考えられる。

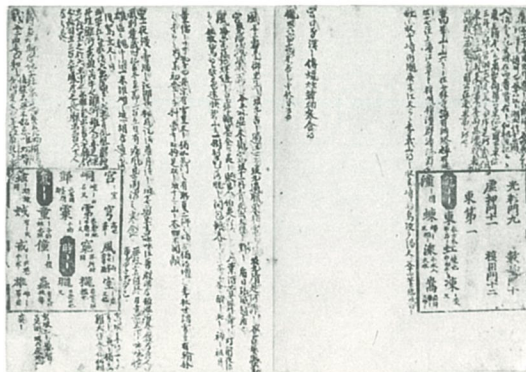
このような中国の辞書は早くから日本にも伝わり(藤原佐世「日本国見在書目録」、形式・内容ともに大きな影響を与えた。奈良時代の「華嚴經

春部郡	小野	五郎	大桑	下沼	上沼	前刀	小弓	丹羽	羽	葉栗	三宅	島田	海部	八田	日置	三刀	物忌	海部	新屋	中島	美和	神戸	津積	志摩	伊福	尾張	二色	名鑑	船越	道淳	芳草	英虞	甲賀	名鑑	船越	道淳	芳草
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

和名類聚鈔

音義」が知られている最古のものであり、9世紀初めの空海の「^{でんれいりばんしょうみょうぎ}篆隷万象名義」は、梁代の「玉篇」を底本としたものである。しかし、形式は中国のものにならないながらも、和訓を万葉仮名で付したり、漢和辞書の意味をもたせたり、徐々に日本独自のものが表われてくるが、その最初が昌住の「新撰字鏡」（9世紀末）や、日本古代最大の辞書である源順の「倭名類聚鈔」（10世紀）である。後者は、分類体で各部門別に事物の漢名をしるし、これに注と和訓を加えたものである。他に、幼童教育用に作られた「^{くちずみ}口遊」「色葉（伊呂波）字類抄」が知られるが、特に後者は、仮名で引ける最初の漢字辞書で、中世の代表的な辞書「節用集」につながるものである。中世には鎌倉時代の「^{ちりぶくろ}塵袋」、室町時代の「^か下学集」等があり、公卿を対象に、有職・習俗・地理などの総合的便覧「^{しゅうかい}拾芥抄」などもあらわれた。

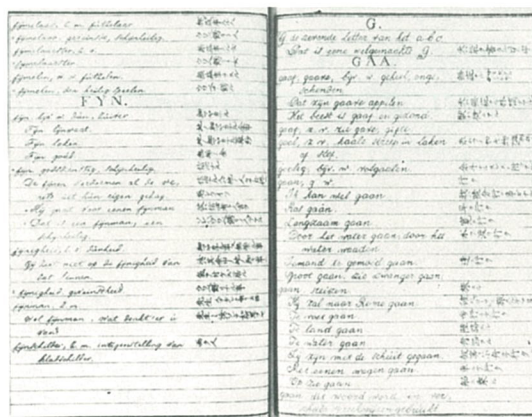
「節用集」は「労力を節約して容易に文字が習得できる」という意味で、「論語」学而編を典拠としていると思われるが、最も古くは1470年（文明2）のものが知られ、その後、江戸～明治に至るまで盛んに刊行された。（出陳本は享保2年の版本）。初めは単に言葉の漢字表記を求めるためであったが、後には百科全書的なものに移っていった。近世に入ると、総記的なもの、主題的なもの、漢学系のもの、和学系のもの、オランダ語関係の



聚分韻略

ものなども加えると、その種類は実に多く、近世文化の多様性を示しており、出陳本は、わずか一部にすぎない。特に「和漢三才図会」は、日本独自の方法で編さんされた 105巻にも及ぶ図解大百科事典で、1713年に発行されてから後、長く広く用いられた。近代における辞書文化の進展は、もちろん近世にまさるとも劣らないのは周知のことであるが、現在、稀本になっているものに、明治初期、文部省開版の「百科全書」があげられる。これはチェンバーズの「国民必携」の翻訳書で、時節柄、その影響はきわめて大きかったという。

学問への入口であり、基礎であり、そして集大成でもある「辞書」は、学者のみならず、広く一般の需用をも満たして発展してきたので、国柄を示し、時代色を示し、価値感を示し、見ていて飽きないおもしろさがある。この展示会ではほんの一部をとりあげたにすぎず、特に中国のものについては日本によく知られたものだけしかあげることができなかったが、「辞書」の歴史を知る一助ともなれば幸いである。



和蘭字彙

「むかしの辞書展」出品目録

I. 日本の事典・辞典

〈古 代〉

1. 新撰字鏡 天治本影印 釈 昌住
昭和8年刊 12巻7冊
2. 倭名類聚鈔 源 順 元和年間刊(古活字本)
「御本」印記 20巻10冊
3. 口遊 真福寺本影印 源 為憲
大正15年刊(古典保存会) 1冊
4. 伊呂波字類抄 橘 忠兼
江戸末期写 10巻10冊

〈中 世〉

5. 聚分韻略 釈 師鍊 室町時代刊
「御本」印記 駿河御讀本 1冊
6. 下学集 巻下 寛永20年刊 1冊
7. 拾芥抄(略要抄) 洞院(藤原)公賢
江戸初期刊 6巻6冊
8. 韻鏡私書〔韻鑑訣〕 室町時代写
「御本」印記 駿河御讀本 1冊
9. 倭玉篇 慶長18年刊 「御本」印記
3巻3冊
10. 燕石集 慶長年間写 「御本」印記
駿河御讀本 2冊

〈近 世〉

11. 和漢音節用集 横島昭武
享保2年刊(後印) 10巻13冊
12. 増補大玉篇大全 毛利瑚珀(貞齋)
嘉永7年刊 10巻・首1巻12冊
13. 日本釈名 貝原篤信(益軒)
元禄13年刊 3巻3冊
14. 和漢名数 貝原篤信(益軒)
江戸中期刊 2冊
15. 大和事始 貝原重春(好古)
享保6年刊 6巻・付1巻3冊
16. 和爾雅 貝原重春(好古)
元禄7年刊 8巻9冊
17. 和漢三才図会 寺島良安編
刊(正徳3年序) 105巻・首尾各1巻81冊
18. 増補多識編 林 道春 江戸中期刊 5巻5冊
19. 名物六帖(人品箋・器財箋) 伊藤東涯編
享保10・宝暦5年刊 11冊
20. 東 雅 新井君美 江戸末期写 20巻・首1巻21冊
21. 宝石類書 紀(高橋)宗直編
江戸末期写 132巻(有欠)90冊

22. 雑字類編 柴野邦彦(栗山)
江戸中期刊 7巻2冊
23. 玉あられ 本居宣長
天保14年刊 1冊
24. 漢字三音考 本居宣長
寛政11年刊 1冊
25. 活語補註 石橋真国 写 10巻10冊
26. 五十音義訣 平田篤胤
江戸末期写 文久3年献本 4巻4冊

○

27. 和蘭字彙 桂川甫周等編 安政2年刊
尾張洋学館旧蔵 13冊
(参考)

- 日本文典 D・クルチウス 1857年(ライデン版)
尾張洋学館旧蔵 1冊
- 和蘭文典 前後編 ライデン版(1810-1822)復刻
安政4年刊 尾張洋学館旧蔵 2冊

〈近 代〉

28. 普通漢語字引大全 平田 繁
明治9年刊 1冊
29. 百科全書 明治16~19年刊(文部省) 20冊
30. ことばの泉 落合直文 明治31年刊
4巻・首1巻5冊
31. 通俗英吉利単語篇 梅浦元善訳
明治4年刊 1冊
32. 英語箋 明治5年刊 1冊

II. 中国の事典・辞典

33. 新刊爾雅 晋・郭璞注
2巻(「博古全雅」明刊の内)
34. 玉 篇 巻第9 早稲田大学蔵本影印
梁・顧野王撰 昭和7年刊(東方文化叢書第6) 1冊
35. 太平御覧 宋・李昉等奉勅撰 明・万暦元年刊
「御本」印記 1,000巻・目録10巻120冊
36. 冊府元龜 宋・王欽若楊億等奉勅撰
写(明)「御本」印記 1,000巻202冊
37. 同文千字文 明・王以成同文・注
明・万暦10年刊 「御本」印記 2巻2冊
38. 圖書編 明・章潢撰
明・万暦41年刊 127巻100冊
39. 康熙字典 付・補遺備考
清・張玉書等奉勅撰
日本・安永9年翻刻 41冊
40. 佩文韻府 清・康熙五十年御定
清刊本 106巻・拾遺106巻200冊

蓬左文庫の蔵書群－2－

〈尾張洋学館旧蔵書〉

尾張洋学館は、尾張藩士上田仲敏や伊藤圭介らを中心に、天保年間より名古屋城三の丸の上田邸（現営林局）内に設けられた蘭学塾で、これらについては、たびたび紹介されているので詳しくは述べないが、ここに備えつけられていたテキストが本文庫に伝わっている。蔵書番号は14－1～42まで、全42部（67点。複本を含む）、ゴウタ版・ライデン版・ブレダ版などの蘭書（オランダの原書）をはじめ、江戸・長崎・名古屋における復刻本（安政版）や訳述書、蘭和辞典等である。内容は、医学・物理・兵学・歴史・地理・語学など多岐にわたる。主なものは「輿地紀略」「和蘭字彙」「日本文典」など。これらのほとんどに「尾張洋学館印」印記がみられる（「蓬左」第7号参照）。入庫の時期は明らかでないが、洋学館長ともいうべき上田仲敏の没後（文久年間）、おそらく明治初年ごろであろう。

〈奥村徳（得）義旧蔵書〉

名著「金城温古録」の著者として知られる奥村徳義（1793～1862。藩主茂徳の諱を避けて得義と改む）の蔵書がこれである。全60部（172点）。文庫蔵書番号の31－1～79（欠番あり）で整理されている。これらにはおおむね「奥村」（朱）という印記がみられ、本文庫に入庫した際に捺されたと思われる「消」印（墨）がその上から捺されている。入庫の時期は明治年間と思われるが未詳。なお、徳義は尾張藩士で御城掃除中間頭を長く勤め、ほかにも「松濤棹筆」などの著書がある。旧蔵書中、主なものは、「尾陽寛文記」「蓬左旧記」などの地誌をはじめ、尾張史料として価値の高いものが多い。すべて写本で、徳義の自筆も少なくない。

〈水野正信旧蔵書〉

同じく尾張藩士（大道寺家臣）の水野正信（1805～69）の旧蔵書。総数は232部（769点）と、かなりの量である。蔵書番号は32－1～33－27まで。ほとんどに「水野正信図書之記」（朱）という蔵書印がみられる。本文庫に入ったのは、やはりその没後（明治2年）の明治年間とみられる。正信は、外国及び蝦夷関係の事に興味が深く、それらの資料を収録した「青牖叢書」の編者として名高いが、ほかに「青窓漫筆」「青窓紀聞」「資治雑笈」のような大部の随筆・雑纂類も、この旧蔵書中に含まれている。その他、奥村本と同じく重要な尾張史料が多く、正信自ら、あるいはその側近の者の手になる写本がほとんどで、若干の刊本が加わっている。

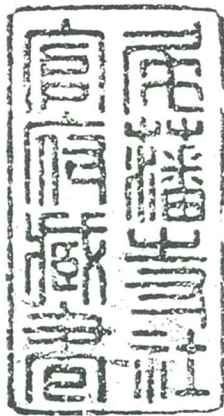
蓬左文庫の蔵書印

その6.「尾藩寺社官府蔵書」印記
「尾張府尹廳印」

織 茂 三 郎

本文庫には、尾張藩各役所備えつけの資料も所蔵されており、それぞれの印記がある。前々回の「御記録所図書之記」や「御日記所」もその例に入るが、今回は「尾藩寺社官府蔵書」と「尾張府尹廳印」のふたつを取りあげた。寺社官府とは寺社奉行所、府尹廳とは名古屋町奉行所のことであろうが、後者については、一応検討の余地がある。

さて、寺社奉行と町奉行は、これに勘定奉行（あるいは国奉行）を加えて、近世幕藩体制下においては三奉行と称される行政および司法上重要な役職で、寺社奉行は名のように寺社方を、町奉行は城下の町方を支配・管理し、いずれも定員は2名、役高（原則として在職中のみ支給）は500石、席順は寺社奉行の方が上位を占めた。まず、「寺社官府蔵書」の印記をもつ現存の資料には、尾張藩士の系譜を集成した「士林派洄」や「柳営（幕府・將軍またその住居、すなわち江戸城のこと）年表」などがあり、印のサイズは、たて74mm・よこ39mmの長方形の大型。つぎは「尾張府尹廳印」であるが、府尹（ふいん）というのは中国の古典的な官職名で、地方長官の一種に属する。しかし、近世の日本には、これにぴったりと合うものが見当らず、尾張府尹とは何を指すのか、かならずしも明らかでない。単に尾張の府（尾府ないし張府）といえ、その首府すなわち名古屋となることは、甲斐や駿河の首府を、それぞれ、甲府・駿府などと称するのと同様であるが、尹廳ともなれば、いささかまぎらわしい。ただ、尹には、前記のように、地方長官の意味があり、役目は重いが地位はそれほど高くないので、名古屋城下を司どる町奉行所とみて差し支えないように思われる。ちなみに、京都の町方には京職（きょうしき。左京・右京にわかれ、その長官は大夫）があり、これを唐風に書けば「京兆（けいちょう）尹」となるが、中世以降はほとんど空名に帰し、近世には京都町奉行が置かれた。これも「尾張府尹廳」を「名古屋町奉行所」に当てる有力な拠りどころの一つである。印のサイズは、たて56mm、よこ37mm。（蓬左文庫調査研究員）



「尾藩寺社官府蔵書」印記



「尾張府尹廳印」印記

出版物一覧

名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録(S.50年刊)	3,500円	蓬左文庫重要文化財図録(S.52年刊)	200円
名古屋市蓬左文庫国書分類目録(S.51年刊)	4,000円	日本の古典<蓬左文庫図録>(S.52年刊)	200円
名古屋市蓬左文庫古文書古絵図目録(S.51年刊)	2,500円	蓬左文庫・源氏物語図録(S.53年刊)	300円
尾崎久弥コレクション目録第一～三集 (S.52～55年刊)	各 1,500円	蓬左文庫所蔵古地図複製(S.55～56年刊) No. 1～No. 7	各 1,800円
名古屋叢書(正編)索引・総目録(S.53年刊)	2,000円	No. 8(尾張志付図)春日井郡	1,800円
名古屋叢書続編 索引(S.47年刊)	700円	名古屋叢書三編第12巻(S.56年刊)	
名古屋叢書続編総目録(S.44年刊)	400円	(葎の滴)諸家雑談・家事雑識	3,000円
善本解題図録第一～三集(S.55年再版)	各 300円		

★以上の出版物は、本文庫事務室において頒布しています。郵送希望の方は郵送料が必要ですので、お問い合わせ下さい。(ただし、古地図複製は郵送不可)

★本文庫所蔵古地図の精密な複製を作成し、希望者には頒布しています。

★「名古屋叢書三編」(20巻・付1巻予定)の第1回配本を頒布中です。ただ今、第2回配本を準備していますが、昭和57年1月末～2月頃に頒布いたします。

利用ご案内

- ▷開館時間 午前9時30分～午後5時
- ▷休館日 毎月曜日・第3金曜日(館内整理日)
- 祝日 (日曜に重なる場合は日曜開館、月・火休館)
(月曜 # 月・火休館)
- ▷閲覧 館内に限り、館外貸し出しはいたしません
(閲覧料) 普通図書 無料
重要図書 有料(1部100円)

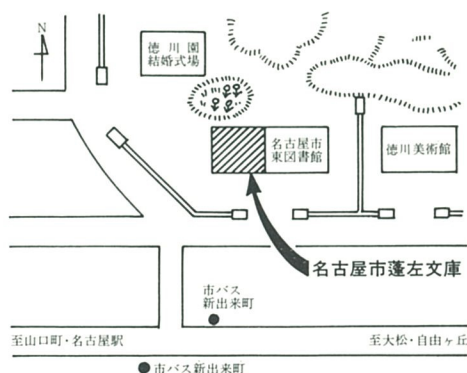
- ▷展示 常時蔵書の一部を展示
(特別展を除き入場無料)
- ▷複写サービス 普通図書のうち保存上影響のないものについて複写サービスを行ないます。その他、マイクロフィルムの利用、写真撮影の申請を受付けますので、ご来庫の上、ご相談下さい。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001番地

☎(052)935-2173

(市バス 新出来町 北 100m)
山口町 東 500m)



年末年始休館のお知らせ

12月28日～1月4日

「蓬左」第8号 ☆昭和56年12月5日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷(東区泉2-3-18)